吉川幸次郎全集

第六巻

筑摩書房

吉川幸次郎全集第六巻
昭和四十三年四月十日発行

著者　吉川幸次郎

東京都千代田区神田小川町二ノ八
発行者　竹之内静雄

東京都千代田区神田小川町二ノ八
発行所　筑摩書房
電話　東京(291)七六五一(代表)
振替　東京四一二三
印刷　多田印刷株式会社
製本　大口製本株式会社

落丁・乱丁本はお取替いたします

吉川幸次郎全集　第六巻　目次

項羽の垓下歌について……三
漢の高祖の大風歌について……二三
漢の武帝……四三
第一章　阿嬌　四三　第二章の上　匈奴　六九　第二章の下　賢良　一〇三
第三章の上　西域　一三　第三章の下　神仙　一三七　第四章の上　返
魂　一四九　第四章の下　望思　一五九　むすび　一七一　年表　一八五
司馬相如について——中国文学史の開幕——……一九一
常識への反抗——司馬遷「史記」の立場——……二二九
史伝の文学……二三六
「史記」と日本……二四一
揚雄……二五四
班固の詠史詩について……二五六
推移の悲哀——古詩十九首の主題——……二六六
第一章　はしがき　二六六　第二章　不幸な時間の持続　二七〇　第三章
幸福の不幸への転移　二八五　第四章　死に至る時間　三〇六　かりのむ
すび　三一〇
古香爐詩……三三一

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

短簫鐃歌について……三四〇
＊
戴宏解疑論考……三五六
附　訳文……三六五
樂浪出土漢匜図像考證……三七九
附　訳文……三八七
書舊文二篇後……三九八
附　訳文……三九九
春秋正義書後……四〇〇
附　訳文……四〇三
＊
アメリカと漢帝国――悲哀の歴史なき国――……四〇七
＊
附録　英文要旨……四二六
Hsiang Yü's *Kai-hsia ko.*（項羽の垓下歌について）

On The "Song of the Great Wind" Composed by the First Emperor of the Han. (漢の高祖の大風歌について)

Sorrow at the Passing of Time : The Theme of the Nineteen Old Poems of the Han. (推移の悲哀)

*

自跋……四七

口絵　楽浪出土漢匠図

吉川幸次郎全集　第六巻　漢篇

項羽の垓下歌について

一

漢の五年、すなわちBC二〇二年、西楚の覇王と自称する項羽が、競争者劉邦との戦にやぶれて、自殺する直前、垓下、すなわち今の安徽省霊壁県の東南に陣したとき、騅と名づけられる愛乗の馬と、虞という名の愛妾を前にして、悲歌慨慨、自ずから詩を為り、

力拔山兮氣蓋世
時不利兮騅不逝
騅不逝兮可奈何
虞兮虞兮奈若何

とうたったということは、司馬遷の「史記」の項羽本紀に見え、班固の「漢書」の陳勝項籍列伝も、それをおそっている。

「史記」の文を訳出すれば、

項王の軍、垓下に壁す。兵少くして食尽く。漢軍と諸侯の兵と、之を囲むこと数重なり。夜、漢軍の四面皆な楚の歌するを聞き、項王乃ち大いに驚きて曰わく、漢は皆な已に楚を得たるか。是れ

何ぞ楚の人の多きやと。

項王則ち夜起きて、帳の中に飲む、美人の名は虞なるもの有り。常に幸せられて従う。また駿馬、名は騅、常に之に騎る。是に於いて項王乃ち悲歌忼慨し、自ずから詩を為りて曰わく、

力は山を抜き　気は世を蓋いしに
時に利あらずして　騅は逝かず
騅の逝かざるは　奈何す可き
虞よ虞よ　若を奈何せん

歌うこと数闋り、美人之に和す。項王泣数行下る。左右のもの皆な泣き、能く仰ぎ視るもの莫し。

「漢書」の文章も、ほぼ同じであり、自為詩曰を自為歌詩曰とし、歌数闋を歌数曲とするなどの小異同はあるが、歌の文句は全くおなじい。なお「史記」「漢書」とも、それが項羽戦死の時である漢五年十二月にさきだつことといくばくであるかを明記しないが、「漢書」を編年体に書き改めた荀悦の「漢紀」では、戦死とおなじく冬十二月のこととする。また歌の文句は、「漢紀」に現れるものも、全く同じである。

もとより歴史事実がこの通りであったかどうかは、疑問であるとしなければならない。「史記」の記載は、漢初の部分についても、たといその先秦の部分ほどではないにしても、なお小説的なふくらみを示すようであり、この条も例外ではない。ただそれが司馬遷以前すでに存在した話であることは、疑いない。司馬遷は、この条をも、他の漢初の記事とおなじく、陸賈の「楚漢春秋」その他にもとづきつつ、書いているに相違ないからである。

なお唐の張守節の「史記正義」には、「楚漢春秋」に見えるものとして、虞美人が項羽に和した歌というものをも、載せる。

漢兵已略地　　漢の兵は已に地を略い

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

四方楚歌聲　四方に楚の歌の声あり
大王意氣盡　大王の意気は尽きたるに
賤妾何聊生　賤しき妾の何んぞ聊んじて生きん

宋の王応麟の「困学紀聞」巻十二には、この虞美人の歌なるものを証拠として、漢初すでに五言の詩があったことを主張しようとするが、それは当面の問題ではない。この論文が問題としようとするのは、項羽の歌それ自身についてである。

二

項羽のこの歌は、かつては得意の絶頂にあった強力な人物が、今や失意のどん底にあることを悲しむ歌であること、いうまでもないが、私がもっとも注意をはらいたいのは、そうした不幸の到来が、もっぱら運命のいたずらとして歌われていることである。

すなわち第一句

力拔山兮氣蓋世

これは生れつきのものとして自己に与えられた能力をうたう。司馬遷が項羽本紀のはじめに、「籍は長け八尺の余、力は能く鼎を扛げ、才気は人に過ぐ」というのは、この詩と照応させるためにあらかじめ張った伏線であろうが、この歌では、扛鼎の力は拔山と比喩的に誇張され、過人の気は蓋世と拡大されている。うち蓋世という言葉は、単にその精神の能力の強大さを意味するばかりでなく、その能力が充分にのびきって、世の中に蓋しかった幸福な時代が過去にあったことをも、示唆するであろう。要するにおのれは生理的にも精神的にも超人的な能力の所有者であり、またその能力を障害なく発揮し得た時期があった。

しかるに現在の自己はそうでないことをいうのが、第二句である。

時不利兮騅不逝

「時に利あらず」もしくは「時は利あらず」というのは、自己に不利益な時間の到来を意味する。そうしてその前提としては、時間は、ある人間には利益を与えまたある人間には不利益を与える要素をふくみつつ、推移してゆくという認識があると思われる。且つのちに説くように、項羽がしばしば「天の我を亡ぼすなり」といったということと思いあわすと、利益不利益の要素が時間の推移の中に交替するのは、人間の主宰である天の所為であるという認識があると思われる。思いあわすのは、「孟子」公孫丑下篇に、「天の時は地の利に如かず」という天の時であって、漢の趙岐の「孟子章句」に、「天の時とは、時日、支干、五行、王相、孤虚の属なり」といい、朱子の注もそれをおそう。時日、支干以下は、天の与える時の吉凶を、占星術師が測定する技術の名である。

そうしてかく不利益な時間の到来の結果として、愛乗の馬である騅も、もはや歩もうとしない。騅とは、「漢書」の顔師古の注に、「蒼と白と雑れる毛のものを騅と曰う、蓋し其の色を以て之に名づく」とあるように、葦毛の馬であるが、不幸な時間は、その支配を、無心の動物の上にも及ぼし、騅も、もはや歩もうとはしない。かつては自己の幸福の形成にあずかった駿馬が、もはや歩もうとしないのは、不思議のようであるが、実は不思議でない。人間には知ることのできない何ものかの、おそらくは天の、意思として、暗い時間が到来したためである。いや騅の歩まぬことこそ、不吉な時間の到来のしるしである。

「時に利あらず騅逝かず」というこの句は、そのように読める。わが桃源禅師の「史記鈔」には、「平生一日千里ノ馬トテ秘蔵シツル馬モ今ハ騎テ逝ヘキ方モナケレハ乃騅モ用ニ不立ヌ用ニ不立レハ騅不逝ナリ」と説き、乗ってゆくべき方向が、この名馬からも奪われたと読むが、そう読むのは無理なように思われる。

ところで、こうした不利な時間は、人間以上の何ものかの作用として来るのであるから、抵抗は無駄であり、

服従あるのみである。したがってその結果として現れる「騅不逝」に対しても、何とも処置のしようがない。それを歌うのが、第三句である。

騅不逝兮可奈何

可奈何の義は、いうまでもなく不可奈何であって、いかんともすべからざることをいう、絶望の言葉である。したがってこの句は、「騅の逝かざるは奈何す可き」と読まねばならない。宋玉の「九弁」に、専思君兮不可化、君不知兮可奈何、専ら君を思うも化す可からず、君の知らざるを奈何す可き、とあるのが、他の用例である。坊間の本には、この句を、「騅ノ逝カザルハ奈何ス可キモ」と読むものがあるが、それは誤りである。

要するに、暗い不吉な時間は、項羽の周辺をおしつつみ、愛乗の馬をもその支配の下においている。ところで、おなじく暗い時間の下にある周辺の存在で、より多く項羽の関心をつなぐものがある。愛姫の虞である。虞よ虞よ、おまえの上にも、くらい時間はおそいかかっている。しかしわたしは、おまえの不幸を、どうすることもできない。抜山の力と蓋世の気のもちぬしである筈のわたしが、今やおまえの不幸をどう処理しようもない。それが第四句の

虞兮虞兮奈若何

であり、「漢書」の顔師古の注に、「若は汝也」と訓ずる。

三

垓下の歌の逐字的な意味は、以上の如くであると信ずるが、しからばこれは、人間は、不可知な運命の糸の支配の下にある、と意識した人物の言葉である。人間は偶然に幸福であり、偶然に不幸である。それは人間が、人間以上の何ものかの、おそらくは天という言葉で意識されるそれの、支配下にあるからであるが、天の操る運命

の糸は、恣意に幸福の方向へかたむき、また恣意に不幸の方向へかたむく。操り方は恣意であるが、その生む結果は絶対である。運命の糸が一たび不幸の方向にかたむいたがさいご、もはや人間の能力も、努力も、すべてはむだである。そうした意識のもとに、この歌は歌われていると、観察される。

またそもそも、そうした意識をいだきつつ滅亡した英雄として、項羽をえがくことが、「史記」項羽本紀全篇の、一つの重点であったように思われる。項羽という人物は、その失敗を、みずからの軍事力政治力の不足には帰せずして、抵抗すべからざる天の意思であると意識していた、ということを、司馬遷は項羽本紀のなかで、くりかえしくりかえし叙述している。

その第一は、いま問題としつつある帳中悲歌のくだりについで、

項王乃ち復た兵を引きて東し、東城に至る。乃ち二十八騎有り。漢騎の追う者、数千人。項王、自ずから脱するを得ざることを度り、其の騎に謂いて曰わく、

吾れ兵を起こして今に至るまで八歳なり矣。身ずから七十余の戦いせしに、当る所の者は破れ、撃つ所の者は服し、未まだ嘗つて敗北せず。遂に天下を覇有せり。然るに今は卒に此に困しむ。此れ天の我を亡ぼすにして、戦の罪に非る也。

ということである。また第二には、すぐそれにつづけて、

今日は固より死を決せり。願わくは諸君の為に快く戦い、必ず三たび之に勝たん。諸君の為に囲みを潰り、将を斬り旗を艾り、諸君を令て、天の我を亡ぼすにして、戦の罪に非ることを知らしめん。

ということである。また第三には、いよいよその末路に近くして、烏江の川岸に舟を用意して待つ村おさに対し、その厚意を謝絶して、

項王、笑いて曰わく、天の我を亡ぼすなり、我何ぞ渡ることを為さんや。

といったと見えることである。

かく三度くりかえして「天亡我」という言葉が見える。いうところの天とは、人間の主宰としてありつつ、人間の運命を偶然に変化させる存在として、意識されていたと、しなければならない。

また項羽自身が、みずからの滅亡をそう意識したばかりでなく、おなじ意識は、敵がわの漢の陣営にもあったと、記されている。張良と陳平が、最後の決戦を漢王にうながすところに、

漢は天下の太半を有し、而して諸侯も皆な之に附く。楚は兵罷れ食尽く。此れ天の楚を亡ぼす時なり。其の機みに因りて遂に之を取るに如かず。

ということである。

またそれは一篇の重点であるから、司馬遷の論賛でも、丁寧にそのことが論ぜられている。すなわち司馬遷によれば、項羽の失敗は、その驕慢と無知と暴力主義の結果である。つまりその努力の方向をあやまった為であって、彼のいうごとく、「天が亡ぼした」のではない。「天が亡ぼした」といったのは、誤謬であるとして、次のように論ずる。

自ずから功伐に矜りて、其の私智を奮い、而して古を師とせず。覇王の業、力を以て征せんと欲せんと謂い、天下を経営すること五年にして、卒に其の国を亡ぼせり。身は東城に死せんとして、尚お覚め寤らず。而して自ずから責めず。過まてり矣。乃ち引むいていう、天の我を亡ぼすにて、兵を用うる罪に非ずと。豈に謬らず哉。

司馬遷のこの批評は、班固の「漢書」の論賛にもそのまま使われている。また揚雄の「法言」の重黎篇にも、次のような議論がある。

或ひと楚の垓下に敗れて方に死なんとするときに天なりと曰いしことを問う。曰わく、漢は羣の策を屈

くし、羣の策は羣の力を屈くしたり。楚は羣の策を憎みて、自ずから其の力を屈くす。人を屈くす者は克ち、自ずから屈くす者は負く。天は曷んぞその故とならんや焉。

やはり、「天亡我」という項羽の見解を迷妄として否定するのであるが、かく丁寧に議論の対象となっていることは、みずからの滅亡を天の恣意と意識したことが、項羽の伝記の重要な特徴であったことを、裏から物語るものである。

この意識の韻文による表現が、垓下帳中の歌である。もし項羽本紀のもつ小説性を重視するならば、この歌はそのクライマックスであるであろう。

四

なお、このあたりで、一つのことを附言しておきたい。

この歌の本文は、中国の所伝による限り、すべて今本の「史記」に見えるものとおなじである。まず唐宋の類書では、「太平御覧」巻八十七皇王部に「史記」を引くが、歌の文句はおなじである。また宋人の編んだ総集では、郭茂倩の「楽府詩集」巻五十八琴曲歌辞の巻に、「力抜山操」と題してのせ、朱子の「楚辞後語」巻一に、「垓下帳中之歌」と題してのせるもの、みなおなじであり、更に降っては、明の馮惟訥の「古詩紀」巻十二に「垓下歌」と題してのせて以後、明清の諸選本すべて異同を見ぬ。

しかるにひとり、わが国に伝わる「史記」には一句多くして、

力抜山兮氣蓋世
時不利兮威勢廢
威勢廢兮雖不逝

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com